

二人の役人

宮沢賢治

青空文庫

その頃の風穂かぜほの野はらは、ほんたうに立派でした。

青い萱かやや光る茨いばらやけむりのやうな穂を出す草で一ぱい、それにあちこちには栗くりの木やはんの木のの小さな林もありました。

野原は今あはは練兵場や栗の畑や苗圃なへばたけなどになつてそれでも騎兵の馬が光ったり、白いシャツの人が働いたり、汽車で通つてもなかなか奇麗ですけれども、前はまだまだ立派でした。

九月になると私どもは毎日野原に出掛けました。殊に私は藤原慶次郎といつしよに出て行きました。町の方の子供らが出て来るのは日曜日に限つてゐましたから私どもはどんな日でも初葺はつたけや栗をたくさんとりました。ずゐぶん遠くまでも行つたのですが日曜には一層遠くまで出掛けました。

ところが、九月の末のある日曜でしたが、朝早く私が慶次郎をさそつていつものやうに野原の入口にかゝりましたら、一本の白い立札がみちばたの栗の木の前に出てゐました。私どもはもう尋常五年生でしたからすらすら読みました。

「本日は東北長官一行の出遊しゅついうにつきこれより中には入るべからず。東北庁」

私はがっかりしてしまひました。慶次郎も顔を赤くして何べんも読み直してゐました。

「困つたねえ、えらい人が来るんだよ。叱しかられるといけなからもう帰らうか。」私が云ひましたら慶次郎は少し怒つて答へました。

「構ふもんか、入らう、入らう。こゝは天子さんのところでそんな警部や何かのどこぢやないんだい。ずうつと奥へ行かうよ。」

私もにはかに面白くなりました。

「おい、東北長官といふものを見たいな。どんな顔だらう。」

「鬚ひげもめがねもあるのさ。先せんころ頃来た大臣だつてさうだ。」

「どこかにかくれて見てようか。」

「見てよう。寺林のとはどうだい。」

寺林といふのは今は練兵場の北のはじになつてゐますが野原の中でいちばん奇麗な所でした。はんのきの林がぐるつと輪になつてゐて中にはみじかいやはらかな草がいちめん生えてまるで一つの公園地のやうでした。

私どもはそのはんのきの中にかくれてゐようと思つたのです。

「さうしよう。早く行かないと見つかるぜ。」

「さあ走つてかう。」

私どもはそこでまるで一目散にその野原の一本みちを走りました。あんまり苦しくて息がつけなくなるととまって空を向いてあるき又うしろを見てはかけ出し、走つて走つてたうとう寺林についたのです。そこでみちからはなれてはんのきの中にかくれました。けれども虫がしんしん鳴き時々鳥が百匹ひきも一かたまりになつてざあと通るばかり、一向人も来ないやうでしたからだんだん私たちは恐こくなくなつてはんのきの下の萱かやをがさがさわけて初はつたけ茸をさがしはじめました。いつものやうにたくさん見附かりましたから私はいつか長官のことも忘れてしきりにとつて居をりました。

すると俄にはかに慶次郎が私のところにやつて来てしがみつきました。まるで私の耳のそばでそつと云つたのです。

「来たよ、来たよ。たうとう来たよ。そらね。」

私は萱の間からすかさずやうにして私どもの来た方を見ました。向ふから二人の役人が大急みちぎで路をやつて来るのです。それも何だかみちから外それて私どもの林へやつて来るらしいのです。さあ、私どもはもう息もつまるやうに思ひました。ずんずん近づいて来たのです。

「この林だらう。たしかにこれだな。」

一人の顔の赤い体格のいゝ紺の詰えりを着た方の役人が云ひました。

「うん、さうだ。間違ひないよ。」も一人の黒い服の役人が答へました。さあ、もう私たちはきつと殺されるにちがひないと思ひました。まさかこんな林には気も付かずに通り過ぎるだらうと思つてゐたら二人の役人がどこかで番をして見てゐたのです、万一殺されないにしてももう縛られると私どもは覺悟しました。慶次郎の顔を見ましたらやつぱりまっ青で唇まで乾いて白くなつてゐました。私は役人に縛られたときとつた蕈きのこを持たせられて町を歩きたくないと考へました。そこでそつと慶次郎に云ひました。

「縛られるよ。きつと縛られる。きのこをすてよう。きのこをさ。」

慶次郎はなんにも云はないでだまつてきのこをはきごのまゝ棄すてました。私も籠かごのひもからそつと手をはなしました。ところが二人の役人はべつに私どもをつかまへに來たのもないやうでした。

うろうろ木の高いところを見てゐましたしそれに林の前でぴたつと立ちどまつたらしいのでした。そしてしばらく何かしてゐました。私は萱の葉の混こんだ所から無理にのぞいて見ましたら二人ともメリケン粉の袋のやうなものを小わきにかゝへてその口の結び目を立

つたまゝ解いてゐるのでした。

「この辺でよからうな。」一人が云ひました。

「うん、いゝだらう。」も一人が答へたと思ふとバラツバラツと音がしました。たしかに何か撒いたのです。私は何を撒いたか見たくて命もいらないうに思ひました。こはいことはやっぱりこはかつたのですけれども。

役人どもはだんだん向ふの方へはんの木の間を歩きながらずるぶんしばらく撒いてゐましたが俄かに一人が云ひました。

「おい、失敗だよ。失敗だ。ひどくしくじった。君の袋にはまだ沢山あるか。」

「どうして？ 林がちがつたかい。」も一人が愕おどろいてたづねました。

「だって君、これは何といふ木かしらんが栗くりの木ぢやないぜ、途方もないとこに栗の実が落ちてちや、ばれるよ。」

も一人が落ちついた声で答へました。

「ふん、そんなことは心配ないよ、はじめから僕はぼく気がついてるんだ。そんなことまで何のかんの云ふもんか。どっちから来たらうって云つたら風で飛ばされて参りましたでせうて云やいゝや。」

「そんなわけにも行くまいぜ。困ったな、どこか栗くの木の下へまかう。あ、うまい、こいつはうまい。栗の木だ。こいつから落ちたといふことにすりやいな。あゝ助かった。おい、こゝへ沢山まいて置かう。」

「もちろんだよ。」

それからばらっぱらと栗の実が栗の木の幹にぶつかったりはね落ちたりする音がしばらくしました。私どもは思はず顔を見合しました。もう大丈夫役人どもは私たちを殺しに來たのでもなく、私どもの居ることさへも知らないことがわかったのです。まるで世界が明るくなったやうに思ひました。

遁にげるならいまのうちだと私たちは二人一緒に思ったのです。その証拠には私たちは一寸よつとめ眼を見合せましたらもう立ちあがってゐました。それからそおと萱かやをわけて林のうしろの方へ出ようとなりました。すると早くも役人の一人が叫んだのです。

「誰たれか居るぞ。入るなつて云つたのに。」

「誰だ。」も一人が叫びました。私たちはすっかり失策しくじってしまったのです。ほんたうにばかなことをしたと私どもは思ひました。

役人はもうがさがさと向ふの萱の中から出て來ました。そのとき林の中は黄金きんいろの日

光で点々になってゐました。

「おい、誰だ、お前たちはどこから入つて来た。」紺服の方の人が私どもに云ひました。

私どもははじめまるで死んだやうになつてゐましたがだんだん近くなつて見ますとその役人の顔はまっ赤でまるで湯気が出るばかり殊に鼻からはぷつぷつ油汗が出てゐましたので何だか急にこはなくなりました。

「あつちからです。」私はみちの方を指しました。するとその役人はまじめな風で云ひました。

「あゝ、あつちにもみちがあるのか。そつちへも制^{せい}札^{さつ}をして置かなかつたのは失敗だつた。ねえ、君。」と云ひながらあとからしなびたメリケン粉の袋をかついで来た黒服に云ひました。

「うん、やつぱり子供らは入つてゐるねえ、しかし構はんさ。この林からさへ追ひ出しとけあいゝんだ。おい。お前たちね、今日はここへ非常なえらいお方が入らつしやるんだから^{ここ}此処に居てはいけないよ。野原に居たかつたら居てもいゝからずうと向ふの方へ行つてしまつてここから見えないやうにするんだぞ。声をたててもいけないぞ。」

私たちは顔を見合せました。そしてだまつて籠^{かご}を提げて向ふへ行かうとしました。

慶次郎はぽいっとおじぎをしましたから私もしました。紺服の役人はメリケン粉のからふくろを手に団子のやうに捲きつけてゐましたが少し屈むやうにしました。

私たちは行かうとしました。すると黒服の役人がうしろからいきなり云ひました。

「おいおい。おまへたちはこゝでその蕈をとったのか。」

又かと私はぎくつとしました。けれどもこの時もどうしても「いゝえ。」と云へませんでした。慶次郎がかすれたやうな声で「はあ。」と答へたのです。すると役人は二人とも近くへ来て籠の中をのぞきました。

「まだあるだらうな。どこかこゝらで、沢山ある所をさがして呉れないか。ごほうびをあげるから。」

私たちはすっかり面白くなりました。

「まだ沢山ありますよ。さがしてあげませう。」私が云ひましたら紺服の役人があわてて手をふって叫びました。

「いやいや、とつてしまつちやいけない、たゞある場所をさがして教へてさへ呉ればいゝんだ。さがしてごらん。」

私と慶次郎とはまるで電気にかかったやうに萱をわけてあるきました。そして私はすぐ

初^{はつたけ}蕈の三つならんでる所を見附けました。

「ありました。」叫んだのです。

「さうか。」役人たちは来てのぞきました。

「何だ、ただ三つぢやないか。長官は六人もご家族をつれていらつしやるんだ。三つぢや仕方ない、お一人十づつとしても六十無くちやだめだ。」

「六十ぐらゐ大丈夫あります。」慶次郎が向ふで袖^{そで}で汗を拭^ふきながら云ひました。

「いや、あちこちちらばったんぢやさがし出せない。二とこぐらゐに集まってなくちや。」

「初蕈はそんなに集まってないんです。」私も勢^{いきほひ}がついて言ひました。

「ふうん、そんならかまはないからおまへたちのとつた蕈をそこらへ立てて置かうかな。」

「それでいゝさ。」黒服の方が薄いひげをひねりながら答へました。

「おい、お前たちの籠^{かご}の蕈をみんなよこせ。あとでごほうびはやるからな。」紺服は笑つて云ひました。私たちはだまつて籠を出したのです。二人はしゃがんで籠^{さかさま}を倒にして数へてから小さいのはみんな又籠に戻しました。

「丁度いゝよ、七十ある。こいつをこゝらへ立ててかう。」

紺服の人はきのこを草の間に立てようとしてましたがすぐ傾いてしまひました。

「あゝ、萱で串^{くし}にしておけばいゝよ。そら、こんな工合^{ぐあひ}に。」黒服は云ひながら萱の穂を一寸ばかりにちぎって地面に刺してその上にきのこの脚をまっすぐに刺して立てました。

「うまい、うまい、丁度いゝ、おい、おまへたち、萱の穂をこれ位の長さにちぎって呉れ。」

私たちはたうとう笑ひました。役人も笑つてゐました。間もなく役人たちは私たちのやつた萱^{かや}の穂をすっかりその辺に植ゑて上にみんな蕈^{きのこ}をつき刺しました。実に見事にはなりましたが又をかしかったのです。第一萱が倒れてゐましたしきのこのちぎれた脚も見えてゐました。私どもは笑つて見てゐますと黒服の役人がむづかしい顔をして云ひました。

「さあ、お前たちもう行つて呉れ、この袋はやるよ。」

「うん、さうだ、そら、ごほうびだよ。」二人はメリケン粉の袋を私たちに投げました。

そんなもの要^いらないと私たちは思ひましたが役人が又まじめになつて恐^{こは}くなりましたからだまつて受け取りました。そして林を出ました。林を出るときちよつとふりかへつて見ましたら二人がまっすぐに立つてしきりにそのこしらへた蕈の公園をながめてゐるやうでしたが間もなく

「だめだよ、きのこの方はやつぱりだめだ。もし知れたら大へんだ。」

「うん、どうもあぶないと僕も思つた。こつちは止さう。とつてしまはう。その辺へかくして置いてあとで我われがとつたといふことにしてお嬢さんにでも上げればいゝぢやないか。その方が安全だよ。」といふのがはつきり聞えました。私たちは又顔を見合せました。そして思はずふき出してしまひました。

それから一目散に遁げました。

けれどももう役人は追つて来ませんでした。その日の晩方おそく私たちはひどくまはりみちをしてうちへ歸りましたが東北長官はひるころ野原へ着いて夕方まで家族と一緒に大へん面白く遊んで歸つたといふことを聞きました。その次の年私どもは町の中学校に入りましたがあの二人の役人にも時々あひました。二人はステッキをふったり包みをかゝへたり又競馬などで酔つて顔を赤くして叫んだりしてゐました。私たちはちゃんとおぼえてゐたのです。けれども向ふではいつも、どうも見たことのある子供だと思ひ出せないといふやうな顔をするのでした。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第九卷」筑摩書房

1979（昭和54）年7月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年2月20日初版第5刷発行

底本の親本：「校本宮沢賢治全集」筑摩書房

入力：田代信行

校正：伊藤時也

2000年9月13日公開

2005年10月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二人の役人

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>